

模索する雲南チベット族

上 田 信

(立教大学文学部)

はじめに

2002年に雲南省西北部に位置する迪慶チベット州中甸県は、県の名称をシャングリラ(香格里拉)県へ改め、飛行場の名称もシャングリラ空港とした。その結果この地では、周辺地域を巻き込みながら観光地化が急速に進んだ。シャングリラという名称は、イギリスの小説家ジェームス・ヒルトンが1933年に発表した小説『Lost Horizon 失われた地平線』に登場する理想郷の地名である。小説のなかでシャングリラは、雪をいただく高山に囲まれ、深い溪谷には花が咲き、牛や羊が群をなしていると描かれる。文化の描写には、チベット文化の色彩が強く現れている。

欧米では第二次世界大戦後に、このシャングリラが理想郷として名高くなると、どこがモデルになったのかという問題が、観光業と結びついて語られるようになった。ネパールやパキスタンなどで小説の記述と類似点を有する地域が、シャングリラのモデルであると名乗りを上げるようになった。これらの地域は、観光客を呼び込みに成功する。

ヒルトンが小説を発表したとき、彼は中国にもチベットにも行っていない。そのことから、彼の叙述は資料に基づいていると考えられている。特にもっとも強い影響を与えたと考えている文献は、National Geographic 協会が1923年から雲南西北部に派遣したジョセフ・ロックが、National Geographic の雑誌で発表した探検の報告書である。ロックは麗江周辺のナシ族の文化を調査・研究し、東巴文化を欧米に紹介した。こうした経緯から、中国でも麗江が自分たちの地域がシャングリラであるとの主張も出された。こうした動きに先手を打つように、中甸県は1995年に小説に描かれたシャングリラと中甸を中心とする地域との類似点を見いだす研究を行い、他の地域に先駆けて、地名そのものを「香格里拉」に変更したのである。

地方政府が主導する観光開発は、地域住民の内発的な展開として生まれたものではない。そのために、観光客急増にともない、生態環境の劣化、伝統的な町並みの破壊、伝統的生活習慣の変容など、さまざまな問題を引き起こしている。報告者の上田は、2004年から数度にわたってシャングリラ県および隣接する徳欽県に赴き、チベット族がこうした文化変容に対処しようと活動している NGO を訪ねた。今回の報告で取り上げる NGO は、香格里拉県の市内に拠点を持つシャングリラ民間自然保護協会と徳欽県の梅里雪山周辺で活動しているカクボ(カワ格博)文化社(カクボは梅里雪山主峰の名称)である。なお、2008年のいわゆる「チベット騒乱」後の状況については、外国人がチベット族にアクセスすることが相手にどのような影響を及ぼすのか予測が付かないために、補充調査を行うことを控えており、インターネットで情報を検索するに止めている。

1. 雲南省西北部のチベット族

雲南省西北部は立体的な生態環境によって特徴づけられる。雲南省最高峰の梅里雪山（標高 6,740m）や白馬雪山などの高山のあいだには、金沙江（長江上流部）・瀾滄江（メコン川上流部）と怒江（サルウィン川上流部）が造る大渓谷が刻まれており、数千メートルの標高差のなかで、高地の寒冷草原でヤクなどの牧畜を行う地域から、渓谷の流域で水田耕作を営む地域までチベット族は居住しており、またイ族・リス族・ナシ族などの民族と標高差に応じて棲み分けて共存しながら生活している。

チベット族はこうした生態環境と他民族との交流のなかで、個性的な文化を育んできた。自然との関係を見ると、区域ごと、村落ごと、あるいは家ごとに特定の山を守護神として信仰している。神山の周辺では草木の伐採を禁止したり抑制したりするルールを持ち、その結果、近年まで豊かな自然が保存されてきたのである。さらに多様な民族との交流のなかで、多彩な芸能を発展させてきた。もともとカギュー派・サキヤ派・ニンマ派などいくつかのチベット仏教の宗派が根付いていた地域であるが、17世紀に清朝の後ろ盾を得たゲルク派が他の宗派を圧倒しながら進出した。雲南のポタラ宮とたとえられる松贊林寺（ソンツェンリン・ゴンパ）がダライラマ5世の肝いりで建てられ、この寺院を拠点に勢力を保つようになった。現在も篤い信仰を持つ雲南チベット族は、ゲルク派の僧侶を招いてさまざまな儀式を行っている。

雲南に暮らすチベット族は、伝統的な衣食住を保ってはいるものの、チベット文字の読み書きができるものが少なく、高度なチベット文化を継承することが困難となっている。そのために日常生活の文化を洗練してゆくことで、普遍性を有する文化的結晶を生み出す回路が狭められているように思われる。雲南西北部に先行して四川省の九寨溝の観光開発が1980年代後半から進むと、中国国内でチベット文化への関心が高まり、チベット族の歌手が歌うポップ・ミュージックが流布され、チベットの意匠が現代的デザインとして歓迎されるようになっていく。こうした文化状況のなかで、雲南のチベット族の青年のあいだでは、本来、自分たちが持っていた伝統のなかから独自の創作活動を展開するのではなく、外部から「チベットの」だと思われているステレオタイプの文化にすり寄っていくという現象が観察される。

2004年6月22日は農暦で端午にあたり、シャングリラ県では大規模な競馬大会が開催されていた。日暮れ時になると、街の広場では近在から集まってきた人々がたき火を囲んでそれぞれの土地の踊りに興じる。いくつかの踊りの輪を急ぎ足で覗くと、笛に合わせてシンプルに踊るリス族の踊りのなかで、一番大きな踊り輪は、地元の蔵族のものであった。しかし、若い人はほとんどおらず、お年寄りが多い。青年たちは少し外れたところで、カセットテープから流されるディスコ風にアレンジされたチベットの音楽に合わせて、踊っている。ディスコ風の踊りは地元のものではなく、歌詞も問の手を除けば漢語である。日本の盆踊りで、どこに行っても炭坑節が流れるのと似た現象である。この傾向が続くと、地元の伝統的

な踊りは廃れ、ディスコ風チベット舞踊に取って代わられると思われる。

シャングリラ県市街地の一角に、2004年までは古い町並みが残っていた。この区画は観光開発のために取り壊し予定となっており、奥行きのある民居に住む老人は理解ありそうな外来者を見かけると、家に引き入れて取り壊しがいかに理不尽な施策であるかを切々と訴えていた。2006年に古城を再訪してみると、本来そこにあった古い民居はことごとく壊されて、チベット風で古風な街並みづくりが進んでいた。奥行きのある民居ではなく、1階はチベット物産を陳列した土産物店、2階に洒落たカフェやレストランという決まり切った平板な町並みとなっている。古城のなかの広場では、夏の観光シーズン期間中、夕方になるとディスコ風チベット舞踊の催しが連日のように行われ、観光客も踊りの輪に加わり、喜んでた。こうした伝統の破壊を伴う観光開発は、中国の各地で見られものであるが、シャングリラのケースは、きわめて印象的であった。雲南では観光開発の成功例として知られる麗江が、地方政府が進める開発の身近なモデルを提供している。

2. シャングリラ民間自然保護協会の活動

シャングリラ民間自然保護協会の存在を知ったのは、同県の古城で取り壊される予定の民居において、その保護を訴えるチラシが最初であった。この協会は古城から市街地中心部に出たところにあるチベット・カフェ（西藏珈琲館）に本部がある。このカフェには海外から訪問したバックパッカーを主な客とする宿泊施設があり、現地の有識者による活動友人として国外のネットワークエコ・ツーリズムによる支援拠点としての機能を果たしている。

協会のホームページ (<http://www.shangbala.org/>) によれば、チベット族の札西多吉が1997年にカフェを開業、その翌年にカフェの収入の一部をエコ・ツーリズムのルート沿いの貧困村落への支援を始めたことが活動の起点となっている。協会の設立は2002年であり、シャングリラ県人民政府の環境保護局が主管機関となっている。その設立趣旨は、「自然生態環境、民族伝統文化を保護し、辺境少数民族地区の原始的な生産と生存の方式を改善し、自然資源と人命を消耗しなければ生存できないという悪循環を逆転させ、共同体が自然資源を保有することを前提として、科学的合理的に資源の向上と統合を図り、農民が産業構造を調整することを助け、互助合作を基礎にした持続可能な資源利用を以て目的とする長期的な目標を確立する」とある。公式の設立趣旨は役所向けに堅苦しいものとなっているが、要約すればチベット族を中心とするシャングリラ地区の伝統に根ざした持続可能な発展を目指すということになる。

2004年に香格里拉民間自然保護協会の札西多吉をチベット・カフェに訪ねた。がっちりとしたいかにもチベット人という雰囲気、明るく快活、自信に満ちている。奥の事務所で活動について話を伺う。

まず概況から話が始まる。中国の国土の60%が国有地、40%が集体と個人の所有。保護区は国土の16%ですべて国有。ところがこの保護区のなかに住む人がいる。彼らは貧しく、生きるために森を伐採したり、密猟したりと自然を破壊することも少なくない。彼らが保有

する集体と個人の土地を基礎に、その生活を支えていこうというのが、この NGO の活動であるという。活動しているのは香格里拉の南の小中甸とチベット。小中甸には自然保護区があるが、そこの住民は木を伐採して薪にして街に売ることを主な生活の糧としている。これをなんとかするために活動している。とパソコン画面に写真を示しながら、具体的に説明してくれた。

まず最近の話題として、この3月6日にこの地の小学校に、この NGO が資金援助した給食設備がオープンした。その賑やかに、子どもたちが喜ぶ表情が画面に映し出される。この地の小学生は藏族で、家が貧しい。70%ほどが1～4年次までで学業を終えざるをえない。NGO では17の村、680戸、3870人の地区に、九の小学校があるが、5-6年次の子どもたちを集める中心小学がある。多くが寄宿。しかし、その生活は厳しく、それまでは自炊せざるを得ず、勉学の時間も奪われがち。学校は政府が建てたものであるが、生活面のサポートのために、NGO が資金集めをして給食施設を作った。68万元の内、政府から17万元、残りの資金は「朋友から」という。また、二人の大学生に奨学金を出している。

NGO にはアメリカ人のサポーターもいる。また、チベットカフェなどでツアーを募り、チベット族の村にステイしたり、テントに泊まったりすることで、参加費から寄付を含ませる。ツアーが泊まる農家には、NGO が支援して給水施設やトイレの整備を行い、チベットの伝統料理の講習も行い、ツアー客を宿泊させることで、その家に現金収入があるようにする。オランダの旅行代理店と提携して、オランダからツアー客も来る。

現在取り組んでいることは、ウシの放牧の改善。従来の放牧は粗放的なもので、ウシの質も悪い。そこで頭数を増やすので、自然破壊を加速する。大まかな見通しでは、4000頭の従来型のウシを良質なウシ2000頭に置き換えると、乳の生産力も上がり、過放牧の弊害も改められる。放牧のために勉学をあきらめざるを得なかった子どもも、学校に通えるようになる。乳などの商品価値を高めるために、チーズなどの生産も始める計画だという。ツアーからの収入や牧畜の改良で得られる収入が充実してくれば、父親は出稼ぎに行かなくても良くなり、労働力として子どもが駆り出されることも減り、子どもたちが学校に通えるように成るであろう。

またチベットでは、小学校に給食用の菜園を作っている。ビニールハウスなどの技術指導は、解放軍の人から。少し前に札西多吉氏は瀕死の兵士を車に乗せて運び、一命を取り留めさせた。その兵士がお礼をしたいというのをおしとどめ、なにか NGO の活動に役立つ特技はないか、と聞いたところ、高地での野菜作りの技術を持っている、と言う。そこで、技術指導を依頼したのだという。この自然体の柔軟な活動が、この NGO の持ち味かも知れない。

最後に、この NGO の目的は、自然の保全、伝統文化の保護、そして所有者の権利の維持だという。いま香格里拉では外部から来た資本が、わずかな金額で個人所有の土地を買い集めているという。麗江ではすでに、地元のナシ族の大半が土地を売ってしまった。このようなことを押しとどめることも、この NGO の目的の一つだという。

3. カワクボ文化社の活動

雲南西北部にカワクボ山（雲南最高峰で標高 6470m）が、そびえている。2004 年 6 月シャングリラで開かれた「チベット族の伝統文化と生物多様性の保全」というシンポジウムに出たあと、大会主催者が企画したカワクボ山氷河の参観ツアーに加わった。5 月末から 6 月にかけて雲南西北部は乾期となり、カワクボ山を拝むことができたはずであった。ところがこの年は異常で、乾期の訪れが感じられないまま冷たい雨が降り続き、瀾滄江は褐色に増水していた。結局、カワクボ山を望むことなく、数日後に氷河の村から徳欽に戻ったのは、たまたま土曜日だった。

地元の人から得た情報で、土曜日の日暮れに街の長距離バス・ステーションの前のロータリーで、伝統的なチベット族の踊りの集いがあるという。主催者はカワクボ文化社と名乗る地元の小さな NGO だとのこと。日が暮れころロータリーに行くと、広場に面した雑貨屋のなかで数人の青年が丹前のようなチベット族の着物を身につけ、旋子（チベット族の弦楽器）の調律をしていた。結局その日、小雨が降るなか踊りの輪に加わる人は 10 人ほどと少なく、文化社の青年が弦子を腰に当てて奏でながらステップを踏み、後に続く協力者と掛け合いで歌っていた。こんな地味な活動をしているカワクボ文化社は、どんな人が担っているのだろうか、私は気になり連絡を取ることにした。踊りの列で先頭に立っていたカワクボ文化社の主要メンバーの木梭は、会うとシカのような眼をした青年だった。これが文化社との最初の接点である。

文化社のホームページ（<http://www.kawagebo.org/>）によれば、子どもの頃から漢族文化の教育を受けていたカワクボ山麓出身のチベット族の 2 人の青年が、自らが民族文化の知識を持っていないことを痛感し、チベット族の神山として知られた山峰の名を冠した民間組織を 1999 年に設立したとある。その活動はカワクボ地区のチベット族民間伝統文化を収集整理し、民間文化活動を組織することで文化の継承を図ること、また自然を畏敬するチベット族の伝統を回復して、人と自然との〈和諧〉（調和）を維持し、生態環境の保全を図る、さらにチベット族が居住する地域のあいだの交流ならびに他の民族との交流を促進し、チベット文化の発展に寄与することなどが掲げられている。

昆明において病氣療養中の文化社の設立メンバーの 1 人である斯郎倫布から伺った話によると、文化社設立の発想は、1998 年の昆明で交わされた雑談のなかから生まれたという。斯郎倫布は当時、昆明で芸術学校に通っていた。そこで知り合った同級生の少数民族の青年たちが、それぞれ各自の民族文化を継承しているのに対して、斯郎倫布は小学校から漢語しか学ぶ機会がなく、チベット文字の読み書きはもちろん、チベット語では深い話もできないことを実感していたという。カワクボ山麓の氷河の村として知られる明永村で生まれた青年・次里尼瑪と昆明で話しているときに、チベット語を学ぶ場を組織しよう、ということとなり、有志を募って費用を出し合い、1950 年代以前にチベット文化を身につけていた老人を教師として招き、勉強を始めた。勉強を進めていると、チベット語だけではなくそのほかにも文化全般に対して知識が乏しいことを痛感するようになり、「文化社」という民間組織

へと発展させていった。

文化社は設立後に、若手の民族学者であった郭浄、上海からカワクボ地区の美しさに魅入られて移住し、明永村で小学校の教師をしていた馬樺などから、チベット族を外から見る視座を獲得することで、活動の枠を広げてゆく。なお馬樺は私が初めてシャングリラ県から徳欽県に入ったときに、同じマイクロバスに乗り合わせていた。その後しばらくして、増水した瀾滄江に落ち行方不明となっている。辺境の貧困地区に志願して入った英雄とされ、「馬樺に学べ」キャンペーンが展開されることになる。私の眼には馬樺は英雄ではなく、自らの感性に正直な青年に過ぎないであったように映った。ただし中国では、そうした生き方を貫くことはきわめて困難であることは、事実である。

文化社の活動に奥行きを与えているのが、カワクボ地区の貧困村落出身のチベット族の木梭である。彼の村では食べるのにも不足していたが、村民は自らの神山に向かい合い、自然のなかで生きるすべを持っていた。ところが観光化が急速に進むと、村人は観光客を泊めて現金収入を得ようと、周辺の山から大量の木材を伐採して家を増改築し、民宿業を始めるようになった。やがて神山の領域として手を付けることが禁じられていた山林まで、斧が入るようになったという。本来は神々との交流のなかで行われていた芸能に村民は興味を失い、観光客向けにアレンジされた踊りや歌へと変容していった。青年たちは自分の文化の価値に気づかず、村で受け継がれた音楽を見下し、いまではディスコ風にアレンジされた曲に合わせて踊るようになったと、木梭は語ってくれた。

こうした状況に危機感を持った木梭は、文化社のメンバーとともに、伝統的な歌と踊りを訪ねて山村を回り、電気も来ていない村を発掘し、録音技師と発電器を含む機材を担ぎ上げ、録音した。そのテープは、『雲南徳欽藏族民間音楽』（カワグ博文化、雲南民族文化音像出版社）として発行した。反響は大きかったが、しかし海賊版が出回り、結局、赤字になってしまった。この困難な局面を、国外の自然保護 NGO の支援を獲得することで乗り切る。2003年には世界自然基金 WWF と共同して、カワクボ山周辺で神山に捧げる儀式の調査を行い、2004年以降はアメリカに拠点を置く巨大な NGO である The Nature Conservancy (TNC) のプロジェクトとして、〈日卦〉(チベット語 *ri-vgag*、神山の神域として伐採が禁止される区域) の実地調査を請け負うことで、経済的な支援を得る。そのほかフランスや香港の環境保護組織などから、野生動物保護のための基礎調査などのプロジェクトを請け負っている。山間地域での実地調査は、山村で生まれ育った木梭の存在が欠かせない。

カワクボ地区では神山を参拝するときに香柏(ヒノキの一種、学名 *Sabina sino-alDlna*) の枝を焚く。観光客が増えると、多くの住民が天然の香柏樹から枝を伐採し、数円で売るようになった。文化社は伝統文化に合わせて住民のあいだで信望篤いチベット仏教の高僧の口から、樹林を痛めつけることを神々が喜ばないと話してもらい、山林の保護を成功させている。ここには観光開発に流されまいとする知恵が息づいている。

おわりに

西部大開発のかけ声の下で、雲南山間地域では交通網の整備が進み、国内外の観光客が容易にアクセスできるようになった。地方政府はこうした観光客を呼び込もうと、開発を進めている。しかし、その結果、さまざまな矛盾が噴出している。本報告では、こうした矛盾に向かい合うチベット族が主体となる NGO の活動を紹介した。2つのケースの共通点は、地域のなかで伝統文化を再評価する動きが、国際的な持続可能性をもとめる動きと共鳴し合い、あらたな可能性を開きうるということである。